27-3F
特67
751

佐橋五湖作

賣炭翁青馬曳綱　全一册

版權所有
興行權

W2-18290/22

序幕

○上総大原村茶店の場

○　鐵坂峠谷間の場

一　浪人鹽原角右衛門

一　同　女房　おせい

一　同　一子　多　助

一　茶屋の主九兵衛

一　同　女房　おかの

一　富山の藥屋才　六

一　百性鹽原角右衛門

一　商人岸田屋宇之助

　　實ハ岸田宇内

一　百性　貳人

本舞臺正面繩暖簾をかけたる田舎茶店爰ゐ百性攝原角右衛門此傍ゐ商人岸田宇内富山ゝ藥屋才六休ゑいる茶店の女房おかの三人ゑ相手ゐなりいる都て上州大原村茶屋の体在郷唄ゐて幕明く

かの)藥やさん最ろつとお休みなさい(才六)ィヤまだ沼田の方へ用事も有り升のでお暇いたし升どなたもゆつくりとなさいませト歌ゑて藥やゝ入る(かの)新田の旦那も東京のお商人もいつこうゐかまいません煮花でも入れませうか(角右)モウ私ゝ澤山だのろちらのお商人さんゝどうでがんすの(宇内)私も腹がどぶ〳〵いふ程呑ましたとゝなし抔している所へ百性の九兵衛ゝだゝ馬を曳き出て來り(九兵衛)ヲヤ新田の角右衛門さん今おまへさんの所へこれを見せゑ行うと思ひていた所でがんした(角右)ア馬かいくらだの(九兵衛)エイ馬だが五兩五粒ゑーて置升う(角右)ちとたけへやうだ(九兵衛)たけへッて五兩五粒の物ゝ志ひかり有り升(角右)馬がゐいやうだから買て置うといひながら懷ロの胴卷より金包をを出して封を切り小判壹兩出しているのを岸田宇内ゝ是をじつと見ていると右ゝ壹兩を九兵衛ゑ渡ーて(角右)ろれじや壹兩手金を渡して置から直ゑ内へ曳て往て呉れ(九兵衛)ハイ畏り升たと壹兩受取ると(角右)どれゆしゝ數坂の向ふまて用達ゑ行うおやかまゑうごんしたト歌ゐなり角右衛門上手へゝ入ると宇内ゝ是をよく〳〵見ていて角右衛門の跡を追かけく上手へゝ入る本舞臺の九兵衛おかのゝ是を見て合點の行ぬ思入よろしく此道具ぶんまゑす

○本舞臺正面遠山の張物所々ゑ松杉の立木日覆より松の釣り枝眞中ゐ自然石の塚を置き此まゑり熊笹を澤山ゑ植付ある下手ゐ水の流れを見せ小笹の藪疊都て數坂峠谷間の体山おろし谿の音ゑて此道具納るト相方ゑなり返しまへの百性角右衛門向ふより出て來り(角右)何だゝ西の方が冠つて來たがどうかふらねばいひが此山の中でふられたら大變だト本舞たいへ來ゝゝると後より返しまへの岸田宇内走り出て直ゑ角右衛門ゐ追付き思入有つて(宇内)モシあなた大ろふお早い足でムひ升(角右)おまへさん何だゑ(宇内)ハイ先刻大原村の茶屋で馬を買てお手附をお出しゑなる時ろばゐ茶を呑ており升た旅商人で御座ひ升(角右)商人さんどうなすつた(宇内)ハイ始めてお目ゑ掛ッて誠ゑ恥ぢ入り升た事ムり升が私ゝ元武家でムつたが只今てゐ商人となり岸田屋宇之助と申升るが○私の主人が故在つて涙人なし此先の小川村ゑ住居をしており升るが昨日ばかりぞろの主人ゑ面會いたし難義の話しれろの中ゐ五十兩の金さへあれゞ士官が出來るから才覺をして呉れと申され升たが只今の身分で迚も才覺の出來ぬ事と斷念なしていた所ゐなたが手附をお出しなすつた時ゑ一寸見た七八十兩の金の高○誠ゑ押付たお願ひなれど屹度御返却いたし升もへ來年の三月まで五十兩拜借がいたしたさゐゐなたのお跡を追つて參り升てムり升る○角右衛門これを聞キックリとおたる思入ゑて懷ロへ手を入れながら胴卷を押へて(角右)何だ五十兩かーて呉れとこれ

返し

さおいらわ此數坂越を幾度もするがヨれへよふなどろ坊ゲいるから旅人がなんぢうするのだサ名主へ連れて往くから來ひ(宇内)どろ坊の何のといふもんでいムひません名まへまでお明ー中程でムひ升から御得心下されバ是から主人の所へ參り升て兩人で連印の上拜借をいたし升る○どうも主人を世ゐ出さなければ濟ませんモ〻決ーて御損いゥけませんゥらどうぞ來年の三月までお貸ー下さひましト大地人手を付て頼む角右衛門ふるへながら思入あつて(角右)馬鹿野良五十兩といふ大金をヨれがよふな始めくあつたやつゑ誰れが貸ヨ○主人の爲だの忠義だの杯といやアがつくおれが金へ目をかけるどろ坊めサア名主へ來ひいかねへゥ○うぬかうーくやるのだト角右衛門ふるへながら宇内のあたまを○く宇内思入在つて(宇内)ア、いたい〳〵○御尤ぞムひ升が明かして顧ふくらひだもの何でいつわりを申升ふ私のからだハ主人の爲なら廿ヤ三十ぶたれましてもいとひません主人さへ世ゑおれゐか金の融通もお來升から急度御返却いたー升るどうぞお貸しなすつて下さいませトろの儘あたまを下ケて頼むを角右衛門ハ猶〳〵ふるへて宇内の髪の毛を引掴み(角右)うぬがような追剝わ以後の見せしめあううしてやるのだ○つゝけうちゑ打ッを宇内ハ聲をかけて(宇内)おぶちなされて御承知の出來る事ならどふか浮いつ所ゑ主人の所へお出あすつてろの五十金をおかー下され(角右)馬鹿やろうまだ金を借り度といふか名主へつれて往くのハ面到だからぶちのめさたのだエ、往けといつたら往かゐへのかアノ爰などまの灰めがト云なが

ら足ゑて宇内をポントけるもへ宇内わ其儘あとへ倒れ起き上りて(宇内)エ、あまりといへバト壹本ざしの柄へ手をかけきつとなるを角右衛門ハ是を見て(角右)ヤアヨりや脇ざしゑ手をかけているのハおれを切る氣だな(宇内)エ、○何さやふなわけでハムりませぬあなたゐ存分打れたなら金を貸下てさるものと辛抱していれバぶつたる上ゐ土足ゐかけ金も貸ず○私も武士の錄を食だ者見ぜまらずのこなたゑのやうゑせられてハ捨置かれぬどう在りても金ハかさぬといヨまやるか(角右)エ云れた事だ(宇内)イヤ借りなければならぬのだト刀をぬくもへ角右衛門是を見くびつくりして(角右)こりやたまらぬへヨへどろ坊〳〵いひながら逃げやふとするを宇内わとらへて(宇内)サ五十兩の金を貸て呉れなければよん所あくおまへさんを殺さなければなりませんサ貸て下さい〳〵(角右)ヤアどろ坊う人殺し〳〵(宇内)モシ人殺しでわムひません人聞のヨるい事をいヨあいて貸て下さい〳〵(角右)エ、何でおのれゑ金をとられるものかぞろ坊〳〵(宇内)まづかゐまく下さい(角右)ヤア誰ぞ來て呉れ人ごろー〳〵と角右衛門ハ身をゐせり宇内をふり切ろふとーて聲を立る所へ鉄炮の音して宇内の腰骨へ當るゆへ宇内ハろの儘血をはきろれへむつたりとあるを角右衛門ハ是を見て腰をぬかしてうろ〳〵している所へ獵人の鹽原角右衛門鉄炮を持ち上手よりかけ出て來り(涙角)これさあなたハどこもお怪我ハ有りませんか(角右)ハィあなたのおかげで怪我いいたしません大きゑ有難ふがんすどうもヨりいどろ坊めゐ出合ひましたト此時涙人角

右衛門ハ手負ひの顔をよく〳〵見て愕りしく(浪角)ヤアろちと宇内心得違ひをいたしたなア(宇内)旦那さまひよんな事をいたし升た申譯てハムり升ぬが一ト通りお聞あされて下さりませ○相方よなり八年ぶりよてお目あゐ掛り升た所見るかげもないお二人さまのお身の上御新造さまより五十兩才覺あして呉れたなら江戸へ出て士官の身となると家來の私へ手をついてのお頼み此旅人どのが金を所持ムつた所一目見るよりあなたさまを世よお出し申度ひ心よなり心得違ひをいたし升た宇内故天罰主罰一時よ報ひ唯今旦那様のお手よ掛つて死ぬるのハわたりまへてムり升るモシろこなお人決ーて私慾てする盜みてハムひません忠義の爲の此惡心是よて疑ひを晴らして下さりませモシ旅のお人旦那さまモシ〳〵トいひながら落入るを二人か是を見て(浪角)ア、不便な事をいたしたもへ○かゝることをはなさぬバ此不幸を見まいものよやるして呉れよコレ宇内(角右)ア金をうせバよかつた道理て主人の爲よ金がいるといもしつたが嘘だと思つてとり合もずようさなかつたハ私が誤り○ろうしておまへさんハ此人のほ主人ろふなが何れあお住居てムり升るな(浪角)ハイかやうお申すもお恥しいが元トわ少しの縁と食だる武士れ果を只今てハ小川村あて獵人をいたーて居る浪人鹽原角右衛門と申升る(角右)是ハけしからぬ私の名まへが鹽原角右衛門あなたのお名まへハ何と申升るお(浪角)イヤ手前の前が鹽原角右衛門と申升る(角右)ろんならふまへさんも鹽原角右衛門といもつまやるとか私も此沼田の下新田て鹽原角右衛門といひ升る

(浪角)ムゝろんあち先祖がえなーの違もず此上殺よ血筋が在ると常〳〵のえなーて在つたが扨ハろの元がやつぱり某と(角右)同じ名まへえ元祖よりの血筋て在つたか(浪角)ふしぎの縁て(二人)合ひ升たのふ此時向ふより浪人角右衛門の女房おせい一子多助の手を引て出く來り(おせい)ヲ、旦那殿是あムんまたかいなア(浪角)ヤイ女房ろちがろくてもない事を申出ーたのて宇内ハ是れよて相果ているわへ(おせい)エゝ何ととつしやりまもヲゝ宇内の此在りさまこりやどうーた譯てムんすぞいなア(多助)おぢさんハあせ死たおぢさん〳〵(浪角)サア某夫婦を世お出さんと是あムる角右衛門殿よ强談を申かけたるもへ某賊と心得鉄炮よて討ち殺ーた(おせい)エゝろんならああたゞコレ宇内是といふのも私がろなたよ惡ひ事を聞ー升たコレ宇内堪忍してたもひのう(角右)モシお二人さん五十兩是あ持ッており升もへ此金をおまへ方お貸升程よ是よて此宇内殿の心をむろくよせずとすこしも早く江戸へ出て士官の身とおなりあされませ(浪角)其志しハ忝のむムれども始めて合ッたろの元あ借用申てハ(角右)イヤ只ハ貸ません元トハ血筋の一家中ろれなる子供衆を五十兩の替りよもらい受け鹽原の家を讓る積り(おせい)ろふさへあされて下さりますれゞ(浪角)此儘是よて五十金と(角右)ろの小兒と(二人)取りうへまして(おせい)さやうなれバ鹽原さま(角右)角右衛門殿浪夫婦(浪角)何れ江戸より便りをいたさん(三人)おさらゞてムり升○百性角右衛門ハ小兒の多助の手をとり立ちかゝる事木の頭是といつ所よ浪人角右衛門夫婦も顔を見

合して嬉しき思入よて五十両金をいたゞく事三人共此見得よろしく思入りの相方よて

ひやうし幕

八

明治廿二年六月廿日印刷
同　年六月一日出版
版權與行權所有

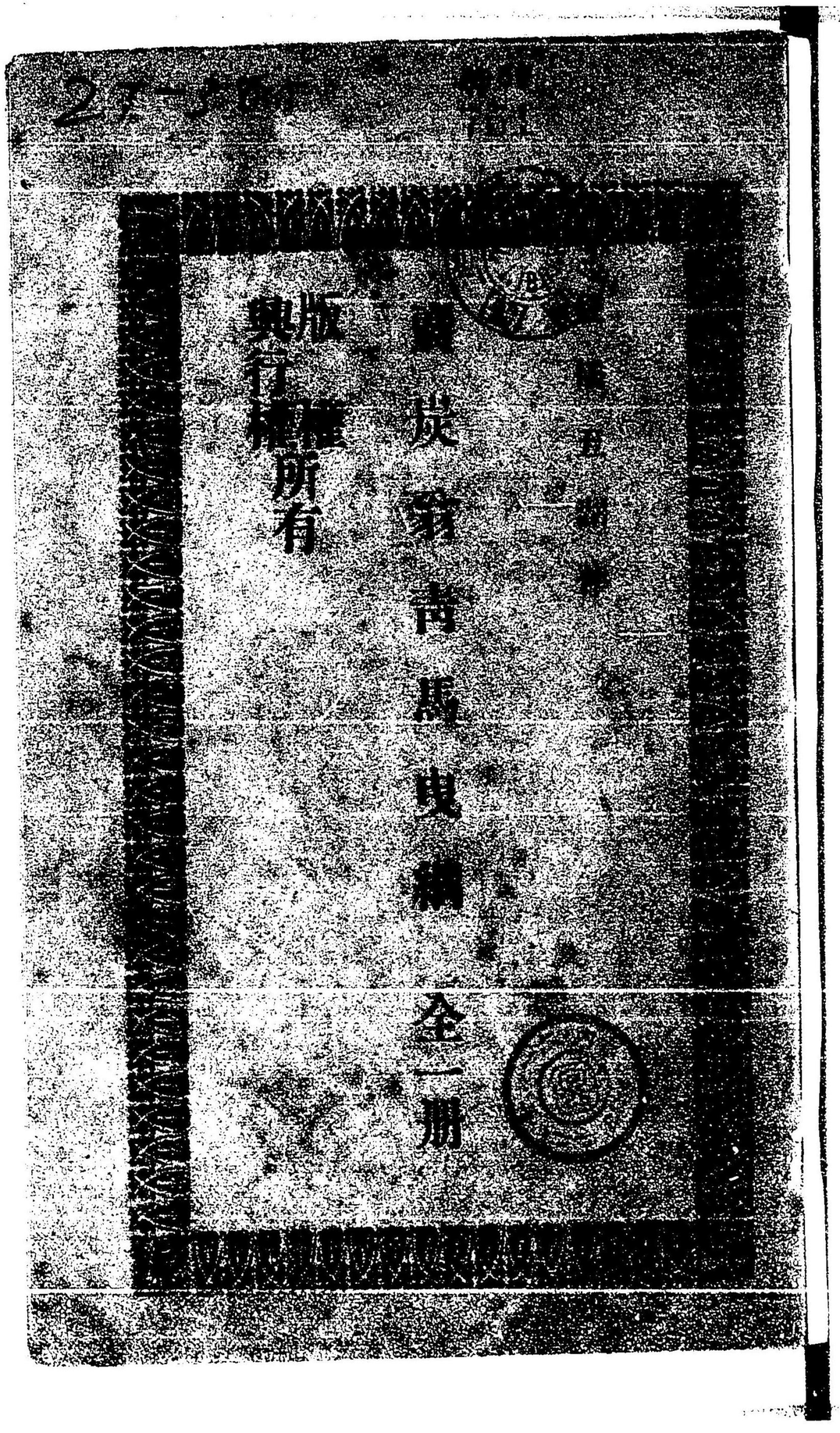
定價金四錢

著作者　東京本郷區本郷二丁目三十九番地　佐橋富三郎

印刷兼發行者　東京日本橋區濱町二丁目拾七番地　保坂芳兵衛

賣捌所　東京日本橋區蠣殼町三丁目十三番地　大石新造

廿二年六月廿七日蠣殼町附島印刷



088712-000-4

特67-751

売炭翁青馬曳綱

佐橋　五湖／著

M22

DBJ-0371